

R・ロネイ著

『商いなき商人』

Robert Launay, *Traders without Trade*, ロンドン, Cambridge University Press, 1982年, 196ページ

I はじめに

本書は、コート・ジボワール北部、コロゴ地方のジュラ人社会についての調査報告書である。著者R・ロネイは、1969年夏、アルベルト・シュヴァイツァー・トラベリング・フェローシップによってオート・ボルタの首都ワガドゥグに旅行する機会を与えられた。このとき2カ月あまり住みこんだ家のアフリカ人一家はたまたまコート・ジボワール北部から移住してきたジュラ人であり、この一家との親交が、著者が研究テーマとしてジュラ人社会を選ぶ直接的契機となった。著者はコート・ジボワール北部のジュラ人の本拠地を訪れて実態調査を行なうことを決意し、幸いナショナル・サイエンス基金とロンビア大学バレット・J・ケレット奨学金を与えられ、1972年1月から73年12月にかけて正味21カ月間、コロゴ市に滞在し博士論文を完成する。本書はこの博士論文をもとに一部は全く新たに書き加えたものである。

評者は、ここ数年来、西アフリカ経済・社会の特殊性を解明する鍵の一つとして、西アフリカ西域において、植民地化前、遠隔地交易を手広く行なっていた商人グループの系譜をひき、今日でもコート・ジボワールを中心に活発な商業活動を行なっているジュラ商人の動向に注目し、それを研究テーマとしてアビジャン市に1982年4月から2年間の予定で滞在している。ジュラ商人についての研究は、植民地化前の遠隔地交易時代に関してはいくつもの論文が欧米の歴史研究者によって発表されているが注1)、植民地化以降の彼らの動向についての研究論文は皆無に近い。そういう状況のなかで出版された本書によせる評者の期待は非常に大きかった。

本書は序文、序論(第1章)につづいて「過去の遺産」と題して植民地化前のコロゴ地方のジュラ人社会を四つの章にわけて粗描する第1部と、そのジュラ人社会の植民地化後の体制的「変化への対応」を分析した第2部の

五つの章と「結論」からなる。

序文

第1章 序論

第1部 過去の遺産

第2章 ジュラとセヌフォ

第3章 戦士・学者・商人

第4章 クランと親族

第5章 婚姻のメカニズム

第2部 変化への対応

第6章 変化の種

第7章 職業・移住・教育

第8章 20世紀においてジュラ人であること

第9章 ジュラのイスラム

第10章 変わりゆく世界における親族関係

第11章 結論、ヘラクレイトスの逆説

(注1) 拙稿「西アフリカのジュラ商人——その系譜についての一考察——」(『アジア経済』第23巻第5号 1982年5月)26~50ページを参照のこと。

II 内容紹介

どちらかといえば記述的な本書の内容を手みじかに要約・紹介することは困難であるが、評者の関心に則して本書が提示している貴重な情報を抜き書的に紹介してみたい。

まず第1章「序論」で、著者はジュラ人の定義から始めているが、マリ帝国時代に発する遠隔地交易に従事するため西アフリカ各地に飛び地的に移り住んでいった「マンディング語系の言語を母語とするイスラム化した商人グループ」の末裔という通説を紹介するにとどまり、とくにそれにとってかわる独自の定義・解釈を提示しているわけではない。著者がフィールドとして選択したのはコロゴ市でも地理的に「ココ」(川向う)とよばれる1本の小川によって截然と区切られたジュラ人居住区であり、その地区の住民社会が第1の調査対象である。

著者はジュラ人社会の都市化にともなう変化を考察するために、コロゴ市の南西50kmの地点にある住民の大多数(84.7%)がジュラ人であるカディオハ(Kadioha)村を第2の調査対象として選択する。

第2章「ジュラとセヌフォ」では、もともと「セヌフォ人の居住地域であったこの地方にジュラ人が彼らの村の一角に、あるいは全く別個の集落を建設して定着する

に至った過程を概観している。

今日につながるこの地方へのジュラ人の大量移入がはじまったのは、17世紀頃で、彼らは森林部に産するコーラの交易に吸引され、この地方に移入してきた。

しかし18世紀に入ってもなく、アカン語系のパウレ人がこの地方の南部に勢力を伸長してきて、交易路をはばまれたためにこの地方を通過する交易は減少し、コロゴ地方よりさらに東方のcong、ブナ、ボンドゥグ、サラなどを通過するルートに交易の中心が移っていった。そして1750年頃には、congに建設されたcong王国の軍隊の一部がこの地方に到来し、現在のコロゴ市に定着し首長国を建設し、この地方のジュラ人社会をその傘下にひき入れることになった。

1908年、植民地化の初期、フランス当局が行なった調査によると、当時のコロゴ地方は人口およそ14万人、そのうちジュラ人は1万5000人(10.7%)、28の首長国が存在し、その首長がジュラ人である国は著者の調査対象であるカディオハ村を含めてわずか三つ、そのうちニャンダナ村の場合は、首長がジュラ人であるにもかかわらずジュラ人は少数派(20.6%)であった。

セメフォ人居住地域に住みついたジュラ人はセメフォ人社会に同化・吸収されることなく独自の文化(イスラム、父系制など、セメフォ人社会は祖先崇拜、母系制)を維持し、今日に至った。両者が融合せず併存してきた理由として、セメフォ人が自給的な農業に従事してきたのに対し、ジュラ人は商業・織布などに特化し地域内分業が成立していたという経済的基盤を著者は重視している。

第3章では、植民地化前のジュラ人社会の構造が粗描されている。ほとんどのジュラ人の男は、少なくともその生涯の一時は商業活動に従事する。しかし遠隔地交易に従事する専門の商人になるものはその一部である。

さきにも述べたように遠隔地交易の主要ルートが東方に移ってしまったため、コロゴ地方では、本格的な遠隔地交易に従事する商人はその後あまり出現せず、彼らの活動はこの地方内部での取引、つまり先住民セメフォ農民との取引に終始した。伝統的に食糧生産には直接手をくまないジュラ人の食糧調達方法は、家族労働あるいは奴隷労働を使用する小規模な生産以外は、セメフォ農民に依頼していた。その食糧と交換にセメフォ農民に提供される商品はたばこ、綿布などであり、とくに綿布は重要な交易品であった。

第4章ではジュラ人社会の「クラン・親族組織」がと

りあげられている。伝統的なジュラ人社会における中核的な社会組織はカピラ(アラビア語のカピラ:部族が語源)とよばれる父系出自原理にもとづく集団である。カピラの規模はおよそ150人で20人内外の既婚男子を中心に構成されている。父系出自を原則とするこの集団に含まれる例外的な要素として奴隷とその子孫がいる。

もともと商人グループであるジュラ人は、血縁関係を超越して、財・サービスの交換を行なうことに慣れていて、たとえば血縁者同士の相互扶助は絶対的なモラルとしては存在しているが、かえってそのために金銭の貸借などでは血縁者を相手とすることはさける傾向があった。総じて農耕民・牧畜民とちがって、ジュラ人の場合、商人としては共同体の土地・資産などは、個人資産ほどの意味をもっていないので、ジュラ人社会における親族関係の機能はきわめて多様であり、商業活動においても母方の血縁者も容易にグループに統合されうるといふ。

第5章は、親族関係のネット・ワークの形成に重要な役割を果たすジュラ人社会の婚姻のメカニズムがとりあげられている。婚姻の形態として著者は「同一カピラ内の婚姻」とカピラ外のものとの婚姻として対奴隷、他のカピラのジュラ人、セメフォ人の場合をとりあげ説明を加えている。

ジュラ人社会では同一カピラ内の婚姻がもっとも歓迎される形態であり、事例的にもその数は他の形態をはるかにしのいでいる。奴隷との婚姻は、ジュラ人の男と奴隷の女との婚姻が多く、奴隷の女はその男の子供を出産するまで妻として認知されない。

女の初婚の相手としては圧倒的に同一カピラ内の男が選好されるが、再婚の場合はこの原則が緩和され、自分のカピラ外のジュラ人との婚姻が行なわれる。その場合相手が同一村内の他のカピラのもの、あるいは他村のものとの場合があるが、前者はそのカピラの村内における政治的権威を高める役割を果たし、後者は商業活動の便宜を拡大する効果をもつが、商人グループとしてのジュラ人は後者を選好するという。

セメフォ人との婚姻は、セメフォ人社会が母系制、ジュラ人社会が父系制であるためもあるが事例は少ない。

以上、第1部で描かれたいわゆる伝統的ジュラ人社会は、植民地化以降の体制の変化にどのように対応してきたか。その模様を記述、分析することが第2部の主題となっている。まず第6章では、ジュラ人社会にインパクトをあたえた諸要因が記述されている。

植民地体制がジュラ人社会にもたらした第1の重要なインパクトは、1908年に発令された奴隷制の廃止であった。これによって奴隷労働を経済的基盤とする富裕層、イスラム学者たちは痛手をうけ、一時的には貧富の差を縮小させるという効果をもった。奴隷は解放されたとはいえ、最近に買い入れられたものを除いては帰るべき故郷もなく、そのままジュラ人社会にとどまった。

第2の変化は、フランス植民地軍の広域支配確立のおかげで、ジュラ人にとって安全に商業活動を行なえる地域が拡大したことであった。とくにそれまでパウレ人によってはばまれていた南部への進出が可能になった。

第3のインパクトは、機械織の綿布の大量流入で、ジュラ人の有力な収入源であった手織綿布の市場が浸食されたことである。

第4には南部における都市化の急速な進展にともない南部向け家畜が塩・コーラなど伝統的商品にかわって重要な地位を占めるようになったことである。

第5にとくに第2次大戦後、本格化したトラックの導入があげられる。トラックの導入は商業の様相を一変させ、商人層はトラックを所有、駆使して大量の商品をさばく大商人と、トラックをもたず小口の商いに終始する小商人とに完全に分解した。今や富の象徴は、かつての奴隷の人数にかわってトラックの所有台数になった。

コロゴ市が県都に選定されたこともあって同市の人口は、1931年の4350人から1963年には2万3760人と急増した。また南部諸都市への食糧の供給地となることにより食糧が商品として重要な地位を占めるようになったが、コロゴ市の先住ジュラ人は2組の競争相手によって脅やかされることになった。第1の競争相手は、外来・新参のジュラ人で、かれらは地元のジュラ人の場合よりも、はるかに拡充した商業ネット・ワークを有しているものが多かった。他方、第2の競争相手として地元のセヌフォ人のなかにも次第に食糧取引に従事する商人が出現し、彼らは地元の生産者（セヌフォ農民）との関係という点で優位になった。

かくして1870年代のコロゴにあっては、マンディング語を話すもの、イスラム教徒、商人は、すべてココ地区の居住者であったが、1970年にはそのいずれのカテゴリーに属する個人も、市内のココ地区以外に居住するものが多数派を占めるに至った。

第7章では職業、移住、教育の問題がとりあげられる。

職業分布の推移については、著者は織布業の減少（しかし著者の調査時点でも単一の職業ではココ地区、カデ

イオハ村とももつとも多く、それぞれ22.2%、43.2%をしめている）と、縫製業、機械修理業、石工など近代的手工業者の増大（13.9%、4.5%）が、ジュラ人社会の近代化に伴う特徴であるとみなしている。

もともとジュラ人が有利な商業機会をもとめて移住することは一般的であった。コート・ジボワールの主要輸出産品コーヒー、ココア、木材などの生産の拡大がすべて南部に集中しているために南部の諸都市への移住は近年、急増しつつある。ココ地区、カディオハ村の調査対象318人の既婚の男のうち異郷に生活した経験を有するものの割合は、それぞれ52%、70%に達している。しかし近代的移住の場合は、故郷とのきずながたれないことが特徴的で、それは都市民として少々は豊かなながらも無名に生きるよりも、故郷での「貧しき長老」を人びとは選好するからだと著者は解釈している。

首都から遠隔の地であるこの地方のジュラ人社会は、またイスラム教徒としてミッション系の学校に吸引されることもなく、西欧型近代教育の浸透は相対的に遅れている。1963年の調査によるとコロゴ地方の就学率は17%と全国平均の45%、あるいは南部のアバングル市の77%に比較すると著しく遅れている。

第8章では調査地のコロゴ地方在住のジュラ人の範囲をこえて広く一般的に「20世紀にジュラ人であること」の意味を検討しており、その点で他の章とは趣きを異にしている。

「今日、コート・ジボワールにおいて自分あるいは他人をジュラと呼ぶことは何を意味するのだろうか。第1にこのことばの原義『商人』は消滅してはいない。しかしそれにもかかわらず、この語を部族名(ethnic category label)として用いることは、植民地前、マンディング語人が少数者として生活していた地域をこえて拡大してきた。まさに新しい潮流であるがゆえに、このラベルはさまざまな地域でさまざまな人びとにとってさまざまな意味を帯びるようになった」(106ページ)。

1965年の人口統計によれば、マンディング語を母語とするマリケ人のうち、故郷外に居住しているものの比率は40%以上に達している。南部に住む北部出身のイスラム教徒のすべてがマリケ人というわけではないが、彼らの中核を形成しているために、イスラム教徒、北部出身者、マンディング語人は南部ではすべてジュラという語に包摂されてしまう。「ア・ケラ・ジュラ・イエ」(彼はジュラになった)という表現も存在するほどである。コート・ジボワール国民という点では、たとえ

ばコロゴ地方出身のジュラ人はまぎれもなくコート・ジボワール人であるが、中南部では北部出身者はすべて「外国人」とみなされてしまう。たとえば1955年南部のガニョア市で、1956年には中部のブアケ市で「外国人」としてジュラ人の排斥運動がおこった。

第9章では、第2次大戦後、マリの首都バマコを起点として西アフリカ各地に発展・拡大していったイスラム革新運動ワッハービズムがコロゴ地方のジュラ人社会にもたらしたインパクトが分析されている。1950年代、カイロのアズハル大学留学から帰国した学生たちがバマコ市で「青年イスラム」という組織を結成したことに端を発するこのイスラム運動は、その後マリ国内だけでなく、ギニア、コート・ジボワールの諸都市に拡大していった。

かつてのジュラ人社会では、イスラム学者たちの間で主導権争いが展開されたことがあったが、それは常にイスラムに関する学識の多寡という次元で争われていた。しかし、このイスラム運動の場合は、既存のイスラム学者の宗教的役割自体を問題にしたので、コロゴ地方にこれが伝播してきたとき、地元のイスラム学者たちは一致してこれに反対した。

コロゴ地方で運動を支持したのは、比較的富裕な階層の人びとであった。彼らは一つの隔離したグループを形成することによって、他の貧困層との紐帯を切断するという経済的利害を含みもっていたと著者は分析している。

第2部の最終の章では、「変わりゆく世界における親族関係」がとりあげられる。独立以後の最大のインパクトは、1965年施行された新民法で、婚姻については一夫一婦制が規範化された。かくしてジュラ人社会の親族関係は、上方からは新民法、底辺からは、その経済的基盤の崩壊（親族組織を生産単位とする織布、商業の衰退）という二重のインパクトにさらされることになった。しかし、その後の事態の推移をみると、新民法にもとづく婚姻届はほとんどなく、旧来のジュラ人社会の慣習が維持・遵守されている。

カピラ内婚は、今日でも依然として支配的で、カディオハ村の既婚の男の66.1%、ココ地区の44.6%がカピラ内婚者である。

このように婚姻そのものに関しては、上記のインパクトにかかわらずあまり具体的な変化はあらわれていない。そして織布業・商業において基本的生産単位であった拡大家族は、それらの経済活動の衰退とともに意味を

失い、したがって年長者の政治的権威を失墜しつつあるが、その上位に立つカピラの場合、成員の多くは南部に移住し、もはや共住ということが成員の規準ではなくなってしまうにもかかわらず、めまぐるしく変転する世界のなかで、精神的共同体として成員相互の紐帯はかえって強化されつつある。

以上の分析にもとづいて「結論」として著者はいう。

かつてのコロゴ地方と今日のそれとを比較してみるならば、「かつて存在し今日、消滅してしまったもの」として、「商業の独占」、「拡大家族」、「入門結社」、「女子割礼儀礼」などを、また「新しい特徴」としては「南部の諸都市への大量移住」、「西欧型教育」、「新職種への就業」、「共同体の近代国家への統合」、「醜い住心地の悪いセメント造りの住宅」（165ページ）などをあげることができる。しかしこうした変化はジュラ人社会にかぎったことではなく「近代アフリカ全体の特徴」である。

著者がジュラ人社会に特徴的なものとして強調するのはカピラの存在である。

「カピラの成員であるということは、ココ地区、カディオハ村、あるいは同様のジュラ人コミュニティの居住者の人格的アイデンティティのもっとも基本的なものとして存在しつづけている」（169ページ）。そしてこの「ジュラ人のイデオロギー的保守主義は、変化に対する抵抗というよりも、変化に直面して、危機におちいったアイデンティティを維持したいという願望を反映している」（170ページ）。「このようなアイデンティティは、近代世界の顔のない匿名性（the faceless anonymity）に対するもっとも有効な個人の防衛手段の一部なのである」（170ページ）と結論する。流転する万物のなかで変わらないアイデンティティ、それを「ヘラクレイトスの逆説」と形容したわけである。

III おわりに

著者が本書に「商いなき商人」という一見、奇妙な表題を付した理由は、何だったのだろうか。おそらくより正確にはこの表題は「商いせぬジュラ」ということだったろう。もともとはマンディング語で「商人」を意味した「ジュラ」を著者は研究対象として選択した。しかし彼がコロゴ地方で1970年代に発見したジュラ人たちは、この地方の商業活動においては力を失っていた。それにもかかわらず、そのジュラ人たちは地元のセヌフォ人たちとは一線を画してカピラ共同体を基盤として、ジュラ

人社会を形成して生活していた。著者の発見したジュラ人はまさに「商いなきジュラ」であったわけである。

そのことは、冒頭にのべた評者の関心からすれば期待はずれであった。本書の著者も、今日も活発に商業活動を行なっているジュラ人を予想し期待し、コロゴ市入りしたのである。しかしそこで発見したジュラ人はもはや「商いせぬジュラ」であった。この「発見」で、著者は改めて調査計画の再検討をせまられた。「一つには、私はココ地区のジュラをすて、川向うに住む商人（新参のジュラ人は、もはやココ地区には居住せず、かつ活発に商業活動を営んでいるものが多かった——引用者注）との接触を試みるか、あるいは、ココ地区にとどまって調査の焦点をほかに移すか」（7ページ）。結局、著者は後者を選択したわけである。

もうにこのような調査における研究者と対象との出会いは、はなはだ宿命的である。あらかじめ一定の構想をもって調査地入りしても、そこで発見される事実によってその構想自体の修正をせまられることもある。その際もちろん、本書の著者ものべているように自分の構想に照らして、調査地の選択を誤ったと判断し、調査地点の変更を行なうことも論理的には考えられるが、実際には一度選択され、ある程度そこに「生きた」という事実の重みが、そのような変更を容易に許さないのではなからうか。そういう意味で、著者の調査地の特質に則して研究方針を変更したということは、それなりに理解できる。

問題は、発見した現実に則して修正した方針にもとづいて行なわれた調査の成果である。その変更によって著者は一定の成果を収めることができたであろうか。その点に関して評者の評価は、本書をみるかぎり消極的である。結局、著者の当初の構想と、現場で発見した現実のズレは、研究方針の修正にもかかわらず、調査の成果にまで尾をひいているように感じられた。それは著者が発見した現実に則して研究方針を変更したものの、そこであらたにとりあげた研究主題は、社会学者にとってはまことになじみ深い、主題ファイルのなかから、親族関係、婚姻といった主題を選びだしたにとどまり、発見した現

実に則した主題を創出し考究するまでにはいたっていないようにおもわれるからである。ココ地区のジュラ人にとってのカピラ共同体の現代的意義についての著者の結論的主張も、それ自体としては魅力的な主張ではあるものの、それまでの各章の分析に照らしてみるならば、やや唐突の感をまぬがれない。著者が設定した「伝統——近代」という基本的な枠組からするならば、それは一つの「逆説」にすぎない。ココ地区のジュラ人社会に対する著者の愛着の吐露という水準にとどまっている。その点で職業、教育、婚姻などに関する調査結果の型どおりの量的表示を中心とした諸章よりも、「20世紀にジュラ人であること」という型やぶりの表題を付した第8章の方が生気にみちあふれている。「20世紀をジュラ人として生きる」ということはどういうことなのか。この主題こそ—アメリカ人研究者が「客人」としてココ地区に住みこみジュラ人と接触するなかで浮び上がってきたリアルな本書の中核にすえられるべき主題ではなかったろうか。しかし、著者は全体的には既存の方法的枠組のなかに用心深くとどまった。そしてココ地区の既婚男子のカピラ内婚率44.6%（152ページ）といった調査結果の量的表示にとどまり、著者の表現を借りていえば、いわば「近代世界の顔のない匿名性」を増幅するにとどまり、21カ月間、このココ地区に生活した著者には当然、浮んでくるはずの、この数字に包摂されている現代を生きつつあるジュラ人1人1人の表情は、消されてしまっている。

もし社会科学という認識方法が、そのような個人的営為の成果を生き生きと表現するのに不向きであるとするならば、著者はそのような方法に執着せず本書の表題にならっていえば「方法なき研究者」の立場にひらきなおるべきではなかったか。

今日、アビジャン市に「客人」として住み、暗中模索しつつある評者のまよいが、本書の著者のまよいを嗅ぎとって、そんな感想を口走らせるのである。

原口武彦（アジア経済研究所海外調査員、在アビジャン）